

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 仙田直人 会員数 約16,200名)

TEL 0422-46-4181

### 日本史A・B

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では本試験「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点など全般的な概略について、2の「試験問題の内容や程度などについて」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

#### 1 はじめに

はじめに平均点を中心とした概観であるが、今年度の「日本史B」の平均点は59.29点で、昨年度を6.26点下回った。平均点が60点を下回ったのは2009年度以来久々のことである。平均点が下降した要因としては、資料の読み取りを要する問題にやや難解なものがあったこと、正誤の判定に迷う構成の肢文が散見されたことが挙げられる。一方で、今年度の「日本史A」の平均点は37.47点であった。今年度は平均点が初めて40点を下回る結果となり、2年連続で過去最低を更新した。ただし、「日本史B」の平均点も昨年度と比べて6.26点下がったため、「日本史A」と「日本史B」との平均点の差は、昨年度の24.74点から21.82点とややせばまった。「日本史B」との共通問題である第2問・第4問は、「日本史A」を高校で学習してきた受験者にとっては難易度の高い問題であった。単純な知識問題になることを避けつつ、平均点を上げることを目指す工夫を今後ともお願いしたい。

以下、それぞれの「日本史」の試験について検討した結果を申し述べる。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

##### 日本史A

2009年度から7年続いた大問6題、小問34題の構成が昨年度大問5題、小問32題に変更されたが、今年度も同様であった。出題範囲は、開国・開港から20世紀末までで、昨年度は高度経済成長の終焉までであったため、時代が下ったことになる。前近代に属する事項はなく、幕末から戦後までバランス良く出題されている。高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）「2内容」の範囲を網羅しており、妥当といえる。

時代別では、明治期8題、昭和戦前・戦中期4題、昭和戦後・平成期7題で、時代横断が11題であった。昨年度からの変化でいうと、幕末期の単独問題が復活して2題出題され、逆に大正期の単独問題が昨年度は4題あったが、今年度は時代横断としてのみの出題となった。昭和から平成にかけての問題が8題から11題に増加しており、受験者にとっては現代史のウエートが高まったことで、難易度が上がったと言えよう。時代を横断する出題も10題から11題に微増し、これも難易度を上げる要因となったといえる。なお「日本史B」との共通問題については、大問2題という分量は昨年度と同様であったが、配点は2015年度35点、昨年度27点から、今年度は36点と元に戻った印象である。

分野別では、小問1題に複数の分野が混合する場合があるので、延べ数を挙げると、政治分野が14題、社会経済分野が17題、軍事外交分野が6題、文化史分野が4題であった。昨年度と比べて社会経済分野が13題から17題に増加する一方、文化史分野が9題から4題へ大幅に減少した。なお分野混合問題は今年度7題出題され、昨年度の11題から減少し、全体の5分の1余りになっている。昨年度、平均点を下げる要因となった文化史分野が減少したものの、社会経済分野が増加して難易度は変わらず上昇し、結果的に平均点は過去最低となった。

出題形式では、昨年度と比較して、択一式の正誤判定問題が7題から10題に増加、一方で正文の組合せ問題が5題から2題に減少したのが特徴だが、その他は、正誤の組合せ問題、語句の組合せ問題はそれぞれ6題と変わらず、年代配列問題が5題から4題と微減、人物（地名等）・事項の組合せ問題が3題から4題へと微増した。受験者が苦手とする正誤の組合せ問題や年代配列問題が昨年度に比べて減少しているのは、平均点を上げる配慮がなされた結果と考えられる。

史資料を用いた出題は計8題で昨年度と同一であった。中で昨年度見られなかった統計表が復活し、図版・史料・グラフの読み取りなど、歴史的な思考・判断を問う工夫が見られた。ただ昨年度指摘したような単なる知識問題からは改善されたものの、提示された史資料の読み取りや分析が受験者には難しいものが多かった。受験者の普段の学習の成果が反映される出題をお願いしたい。

第1問は、学習指導要領「2 内容(1)私たちの時代と歴史」からの出題。妖怪をテーマに近現代史を概観する問題である。リード文は受験者二人の会話で成り立っている。問1は語句の組合せによる空所補充問題である。[ア]は直前に「慶應義塾を創設」、[イ]も直前に「国粹保存を唱えた」とあり、「明六社」は文明開化を学習する際に必ず出てくる用語であるので、判定はしやすい。問2は年代配列問題であるが、それぞれどの内閣かを確定した上で、年代順に並べ替える必要があり、受験者には難しく感じられたであろう。問3は正文の組合せ問題である。史料1の中に「大罪」という言葉があり、「ロンドン条約」に否定的な立場を導き出すことができ、史料2も「日独防共協定」とあるので、正文を見つけやすい。ただし、初見史料であったため、受験者は苦手意識を感じたかもしれない。問4も正文の組合せ問題で、興味・関心を持たせる工夫がほどこされた出題といえる。ただし高度経済成長期における社会経済分野を問うており、かつ読み取りに時間を要する一文が長い選択肢もあって、正答率は低かったであろう。I～IVの図の説明か、選択肢a～dのどちらかが、より簡略なものであったら、受験者にとって取り組みやすいものになったであろう。問5は正誤の組合せ問題であるが、「環境庁」設置と「公害対策基本法」制定の順序を判断するのは難しかったのではないかと。問6は人物と事項の組合せ問題で、文化史分野からの出題であった。「原子模型理論」と「長岡半太郎」を結びつけるのは、受験者にとり容易ではなかったと思われる。第1問は分野混合問題が多く、かつ深い知識と思考力を要する問題であったため、受験者にとって難易度が高かったといえる。

第2問は、「日本史B」との共通問題で、大坂（大阪）に関するリード文から、政治分野と社会経済分野に関する問いが設けられた。問1は語句の組合せによる空所補充問題。[ア]は長州征討のときの将軍を問うているが、13代「徳川家定」か、14代「徳川家茂」かは迷うところ。問2は正誤の組合せ問題。「世直し一揆」や「ええじゃないか」は幕末のキーワードであり、正解しやすかったと思われる。問3は正誤問題の正文選択。大久保利通の業績として内務省設置を選ぶことは難しくなく、また他の選択肢がいずれも誤文として判断しやすく、解きやすくなっている。問4は正誤問題の誤文選択。「住友」と「三池炭鉱」の関係を判断するのはやや難しいものの、他の選択肢がいずれも正文と判じやすく、これも正解を導きやすくなっている。第2問については、今年度も軍事外交分野や文化史分野からの出題はないものの、昨年度の政治分野のみの出題と比べると、やや改善されており、解きやすくなった点は評価できる。ただ知識・理解をみる問題がほとんどを

占めるので、分野についてはバランスを重視しながら、思考・判断、または史資料の活用を要する出題も含める等、工夫をお願いしたい。

第3問は、政治家三島通庸に焦点をあて、主に明治期を中心に、政治分野・社会経済分野・文化史分野など総合的な出題となっている。問1は語句の組合せ問題で、**ア**は文久の改革を想起して「島津久光」を導き出すことができるかがポイント、**イ**は明治初期の煉瓦街から「銀座」を答えさせる問題で、分野が政治と社会経済にまたがり、かつ高度な知識が必要で、受験者には難問と言える。問2は正誤問題の正文選択。④の選択肢はすぐに誤文と判断できるが、②・③の選択肢は判断が難しく、また①も自信をもって正文と判断しにくい。問3は高橋由一の作品を選択する問題で、図説などの資料集を日頃の学習で活用していくことが求められる。どれも明治期の作品であり、判断に迷う受験者は多かったと考えられる。①～④の絵画に、例えば「19世紀の西洋画の代表作」などの説明があれば、単なる知識問題にならず、リード文や「山形市街図」と関連して考察する問題になったと思われる。問4は語句の組合せ問題で、**ウ**・**エ**とも前後の内容から類推可能である。単なる知識問題ではなく、前後の文の読み取りも必要とするよう工夫がみられる。問5は正誤の組合せ問題で、Xで知識を問い、Yで思考・判断力を問う良問である。インフレーションの意味や歴史的事象の背景を理解しておく必要があり、正答率が低くなったとも考えられるが、このような出題は好ましいといえる。問6は年代配列問題で、条約改正の交渉担当者の順序を正しく覚えていないと正解できない。無機質な年号を覚える必要はないものの、選択肢に工夫がほしい。第3問は全体的に難易度が高かったが、良問もみられた。引き続き、単なる知識問題にならず、判断・思考力を問う出題であって、しかも難易度が上がらない工夫をお願いしたい。

第4問は、「日本史B」との共通問題で、近現代の公園をテーマに、政治分野・社会経済分野・軍事外交分野・文化史分野から幅広く出題された。時代も幕末から戦後までバランス良く出題されている。問1は語句の組合せ問題で、**ア**は「三・一五事件」がやや難しいものの、1952年とあることから「血のメーデー事件」が選択できる。**イ**も1909年という年代から判断できる。このような出題から考えると、センター試験は近現代史において、10年ごとの大きな年代で時代をとらえる重要性を示しているともいえる。問2は年代配列問題で、新聞記事と広告を題材に年代を確定させていく必要がある。それぞれのタイトルも参考にしながら、戦中期と戦後期に分けつつ、戦争ごとに整理していく。単なる知識だけを問うのではなく、資料から重要な情報を読み取る力も必要であり、このような出題は歓迎したい。問3は人物・事件と事項の組合せ問題で、教科書の学習で対応できる。問4は場所と事項の組合せ問題。社会経済史分野からの出題であることに加え、説明文を丁寧に読んでキーワードを探し出す必要がある。知識としては教科書の学習で充分だが、これも日頃の地図を用いた学習の重要性を示している。問5は正誤問題の正文選択。一見すると文化史分野からの出題だが、政治分野も含まれるので、難易度は高い。問6は正誤の組合せ問題で、表の読み取りを必要とする出題である。受験者としては、高度な思考力だけでなく文中の用語に関する知識も必要とし、難問といえる。問7は正誤問題の正文選択。正しい選択肢は選びやすいが、その他の選択肢には誤文であると判断するのが難しいものも含まれている。このように正誤問題において、選択肢の全てに、正誤が容易に判断できるものが少ないのが今年の特徴で、受験者を悩ませたと考えられる。問8は年代配列問題。教科書に記された内容を、時期区分しながら内閣ごとに整理して学習していれば十分正解を導き出すことができる。第4問は、総じて受験者にとって難しい問題が多く、「日本史A」の教科書を学習した受験者が力を発揮できる出題をお願いしたいところである。

第5問は、昭和期の経済・社会に関する出題で、分野に偏りがみられた。問1は正誤問題の正文選択。選択肢をしっかりと読んで、使われている用語だけでなく、内容を理解しないと正解は導き出

せない。知識だけでなく、思考・判断力が問われるため、難易度は高い。問2は正文の組合せ問題。「金解禁」の意味するところや、史料の正確な読み取りが必要となる問題で、やはり高い思考・判断力がないと難しい。問3は正誤の組合せ問題。これもYが誤文であることを内容から判断することが求められており、難易度は高い。問4は場所と事項の組合せ問題で、歴史学習においても地理的な学習の要素が必要であることを示している良問である。なお今年は日本地図に都道府県境が示されているが、特に解答上の影響はない。問5は正誤問題の誤文選択。「日本労働総同盟」が大正期であることが想起できれば正解することは容易だが、社会経済分野の中でも労働問題はなじみが薄く、教科書を万遍なく学習していなければ難しい。問6は語句の組合せ問題で、高度経済成長末期の政治分野・社会経済分野を問うている。これは正解を出すのは容易である。問7は年代配列問題。「地下鉄」の登場が大正期であることが想起できれば、残りの選択肢は占領期と高度経済成長期であり、大きな歴史の流れに沿って正解を出すことは容易である。問8は今年度唯一のグラフの読取り問題。財政支出に占める各項目の割合の動きから、何の費用に関するグラフかを判断して、その時代を考察する問題である。各時期の社会経済的な背景の理解がなければ、正解を出すことが難しく、正答率は低かったと予想される。第5問は受験者の多くが苦手とする社会経済分野の出題で、かつ史料や地図、グラフなどを使った問題が多く、思考・判断力が問われたため、受験者には極めて難しかったと思われる。

例年、本会では時代や分野のバランスの適正を求めている。今年度は昨年度同様比較的バランスが取れているものの、分野では政治分野・社会経済分野からの出題が比較的多かったのに対して、軍事外交分野・文化史分野からの出題は少なかった。よりバランスの取れた出題を期待したい。

今年度も受験者の平均点は大きく下がった。出題形式や配点の面からみると、小問数には変化がなく、正誤問題が増加したものの、正誤の組合せ問題や年代配列問題など、受験者にとって難易度が高いと感じられる形式の出題が増えているわけではない。それにもかかわらず平均点が過去最低となったのは、リード文や選択肢の内容が難しく、内容の読み取りの段階から受験者の高い思考力・判断力が必要であったことが原因と考えられる。また例年指摘していることであるが、受験者が得意とする政治分野からの出題でも、実は社会経済分野や軍事外交分野にまたがる内容が含まれており、その点でも難易度を上げたといえよう。単なる知識にとどまらない出題の工夫や、平均点が上がるよう配慮した形跡など、評価できる点は多々みられる。しかしそうした意図に反して、今まで述べた理由や、問題数の減少から一部配点が高くなる問題があったことなどから、逆に平均点が下がってしまったと考えられる。単純な知識問題を極力排除し、思考力や判断力、図版やグラフの読取り技能などを問う工夫をしながらも、受験者の学習の成果が反映されるよう、再度お願いしたい。ここ数年、「日本史A」では平均点が50点台を回復することをお願いしている。来年度も同様に、平均点50点台の回復と、「日本史B」との得点差を少なくしていくことに配慮しての出題となることを強く要望する。

## 日本史B

今年度も大問6題、小問36題の構成で問題数は例年どおりである。時代の範囲は、第1問の問2の高地性集落（弥生時代）に関する問題から、第6問の問6メーデー事件（1952年）までが出題された。旧石器時代、縄文時代からの出題は、時代横断の問題も含めて皆無であった。近現代からの出題は、小問の割合、配点の割合共に全体の約4割を占め、重視される傾向に変化はない。しかし、昭和期（戦中）の単独問題は、2015年度3題から昨年度は1題に減少し、今年度も同様であった。戦後史は、昭和戦前期もしくは明治期と組み合わせた時代横断の設定で3題が出題されたが、単独での出題はなかった。昭和期（戦中・戦後）の問題は、減少傾向が続いているということ

ができる。

分野別の出題では、政治分野が1題増の19題（混合問題を含む。以下同じ）、社会経済分野と軍事外交分野がそれぞれ1題増の10題、文化史分野が4題減の8題である。文化史分野については、宗教、学問、文学、美術の各分野から幅広く出題されたが、宗教（仏教）関係の出題が多かった。複数の分野を横断的に取りあげた出題は14題で、昨年度比2題増であった。歴史像を多面的な視点からとらえることが求められているものと言えよう。出題者のこうした姿勢は評価できるが、受験者にとっては難易度が上がった面もあったと思われる。

解答形式別で見ると、正誤問題が9題（正文選択6題、誤文選択3題）で昨年度より1題減、2015年度より4題減となった。語句の組合せ問題は1題増の7題、人物・場所と事項の組合せ問題は2題増の5題、年代配列問題が2題増の6題、正誤の組合せ問題は2題減の6題、正文の組合せ問題は2題減の3題となった。年代配列問題は、古代から近現代まで、幅広く出題された。時代のバランスが配慮されており、時代ごとの認識を問う上で有効であった。

史資料の活用については、昨年度比1点減の10点となったが、その内訳は文字史料2点（3点減）、地図1点（1点減）、図版（写真、絵図）6点（2点増）、統計1点（1点増）で、多様な史資料に触れさせる工夫がなされた。

第1問は、海外との交流の歴史をテーマとして出題された。大学生の手紙文の形をとった出題は、昨年度の日記形式に類似したものであった。学習指導要領の「1 目標」「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ」に基づく出題と考えられる。中間Aでは、瀬戸内海から平戸港を経て朝鮮半島に至るまでの海路の旅、中間Bでは、日本海側の山陰地方から北陸地方に至る陸路の旅を題材としている。古代から昭和戦後期までを対象として出題されているが、時代ごとのバランスをみると、近世（江戸時代）は6題のうち4題で触れられており、比重が高い。

問1は語句の組合せによる空所補充問題。[ア]は近世初頭の英・蘭の所在地の所在地を、[イ]は高麗王朝滅亡後も蒙古（モンゴル）に抵抗した集団の名称を問うもので、基本的な内容であった。問2は原始・古代から近世までの瀬戸内海に関する正誤判定問題。問われた事項は高地性集落、藤原純友の乱、津料、塩田で、標準的なものと言える。問3は古代及び近世の大陸との人の往来に関する正誤組合せ問題。Xは高向玄理について述べているが、遣隋使に同行して留学し、遣唐使とともに帰国した事実を想起できなければ誤答する。知識を整理できていることに加え、選択肢を正確に読み取る力が必要である。問4は組合せによる空所補充問題だが、地図を用いた点が特徴である。説明文と地図を組み合わせて解答する問題は以前から出題されているが、本問は説明文を読解して空所に該当する地点を指摘する必要がある。意欲的な出題であるが、従来の出題形式とくらべて難易度は上がった。[ウ]は、石見銀山と生野銀山の判別が求められたが、やや難しかったと思われる。問5は年代配列問題。文ではなく写真を用いた出題で、昨年度の追・再試験で見られた手法である。Iの復員・引揚げ船や、IIの満蒙開拓青少年義勇軍ポスターは判断が容易であったが、IIIの電文は、図版説明にある「宣戦布告」の語が日露戦争に関するものであることを見抜けなければならず、難易度がやや高かった。電報の発信者・宛先など、具体的な情報があると判断がしやすかったのではないか。問6は、古代から近代にかけての交通・通信に関する正誤判定問題。問われている事項は、古代の駅制、馬借・車借、近世の飛脚、創業期の鉄道であり、いずれも基本的な内容である。ただし、選択肢④で最初の鉄道の終点を横須賀としているのは、横浜と類似した紛らわしい地名を提示するもので、初期の鉄道の路線選定に関する本質的理解を問うものとは考えがたい。

第2問は、古代の思想・信仰と政治・社会との関係に関する出題である。中間Aは飛鳥時代の中央及び地方での仏教受容と政治との関係が、中間Bは奈良・平安時代の仏教を中心とする信仰と政

治・社会との関係が題材となっている。問1は語句の組合せによる空所補充問題。アは飛鳥寺(法興寺)を建立した豪族が、イは地方行政を担った豪族の任ぜられる官職が問われた。基本的な設問であるが、国司と郡司の性格の相違は重要事項だが、受験者の理解が不足しがちな事項でもあり、難易度は高かったと思われる。問1は7世紀後半の政治と文化に関する正誤判定問題。寺院の建立、初期の戸籍、冠位制度、国史の編纂について問われたが、いずれも基本的事項であった。問3は古代の東アジア諸国からの文化・技術の受容に関する正文組合せ問題で、全体に標準的な水準の肢文で構成されている。問4は奈良時代から平安時代前期にかけての政治抗争に関する年代配列問題。問われているのは藤原広嗣の乱、藤原種継暗殺、承和の変で、この時期の出来事について内容の正確な理解と、大局的な流れの把握ができていれば正解できる。問5は浄土信仰の興隆とその背景について正誤を判定して誤文を選ぶもので、平等院鳳凰堂、空也の布教活動、定朝の仏像製作、阿弥陀堂建築の地方への普及が問われた。選択肢はいずれも標準的な水準である。問6は9～10世紀の地方支配に関する正誤組合せ問題。大宰府による公営田の経営と縁起の荘園整理令に関する説明文が出題された。公営田の意味と荘園整理令についての理解が求められたが、Xは判定の要素が多く、やや難しかったと思われる。「直営方式による」を削除するだけでも、受験者にとっては取り組みやすくなるであろう。

第3問は、中世の政治・社会・文化に関する出題である。中間Aは鎌倉・南北朝時代の武士と恩賞、中間Bは室町幕府の支配と仏教が説明文の主題であった。問1は、鎌倉幕府の財源と御家人統率についての正誤の組合せ問題。Yは大番催促について述べているが、「天皇や将軍の御所を警護する」という文言に惑わされると誤答する。京都大番役に関する正確な理解というより、注意力が試されているように思われる。問2は承久の乱後の関東下知状の一部を示し、その内容理解を問う正文組合せ問題。「京方」が上皇方、「御方」が幕府方を指すことなど、史料に記された情報を正確に読み取る力をみるという意図が明確に分かる出題である。史料を読まなくても解答できる「史料問題」が散見される中、こうした出題は評価したい。問3は鎌倉末期から南北朝期の政治・外交・文化に関する年代配列問題。取り上げられているのはI建長寺船の派遣、II雑訴決断所の設置、III神皇正統記の成立であり、ある時期の時代像を多角的に捉えているかが問われた。IIIは執筆の背景を知っていれば正答を導きやすかったと思われる。問4は室町時代の基本的な用語の組合せによる空所補充問題で、特に難しいところはない。問5は室町期の経済に関する語句と説明の組合せ問題で、大山崎油座と撰銭について問うている。問6は室町時代の対外関係に関する正誤判定問題。水墨画に関する④は文化史的な知識を援用して判断することが求められた。

第4問は、近世の文化・政治・社会に関する問題である。中間Aは近松門左衛門の半生について、中間Bは江戸時代後期の社会・政治と朝廷に関する出題であった。問1は語句の組合せによる空所補充問題で、アは説明文の題材となっている人物(近松)を選ばせる。説明文全体を理解したうえで解答を選ばせるという設問の工夫は評価できるが、近松の本名や父の名など、なじみのない人名が列挙され、説明文は内容が高度であった。文の大半を読み終えないと正答にたどり着くことは困難で、受験者にとっては厳しい出題であった。人名辞典の記述のような体裁をとり、冒頭で浄瑠璃作者であることを明示するなどの配慮をすることで、受験者の負担感は軽減できるであろう。イは鄭成功による明朝再興の動きに関する知識が問われた。問2は近世の上方に関する正誤判定問題。問われた事項は、河川舟運の開発、大坂の荷積問屋、醤油の生産、北前船であったが、いずれも正誤判定のポイントが明確であり、解答はしやすかったと考えられる。問3は元禄文化期の美術作品(見返り美人図、舟橋蒔絵硯箱)の図版と正しい作者名の組合せを答える問題。文化史分野のうち、美術史に関わるものは、作品の鑑賞が基本であることを示す意味で、図版を用いた本問のような構成は評価できる。一方で、作品を見て作者を答えるというシンプルな構成は、暗記に

依存した学習につながる恐れもある。問4は語句の組合せによる空所補充問題。問われたのは寛政の改革、尊号一件で、容易に正答に到達できたと思われる。問5は提示された史料（御触書天明集成の抜粋）に関して、その内容の説明の正誤を組み合わせて解答する問題。第3問の間2と同様、史料を注も含めてしっかり読解することが求められている。史料文中の用語の一部に高等学校での学習の水準を超えるものもあるが、大意が把握できれば解答自体は難しくない。問6は、宝暦事件、明和事件と、藤田東湖・会沢安の尊王攘夷運動の3項目を年代順に正しく配列する問題。江戸後期の尊皇論の展開について、正確な理解が求められた。

第5問は、幕末・明治期の大坂に関する設問で、「日本史A」との共通問題である。問1は語句の組合せにより解答する空所補充問題。徳川家茂と明治天皇についての初歩的な知識があれば解答が可能である。問2は幕末期の民衆運動に関する正誤の組合せ問題で、世直し一揆とええじゃないかに関するものであった。正誤判定のポイントがはっきりした短文が提示されていたので、基本的な知識があれば正答が得られる。なお、Xの世直し一揆については、2012年度本試験第4問の間6で同形式、ほぼ同じ内容で出題されている。問3は大久保利通に関する正誤判定問題。各選択肢で問われたのは、①出身藩、②岩倉使節団への参加、③内務省の設置、④大阪会議への関与で、いずれも容易に正誤を判定することが可能である。問4は明治期の政商・実業家に関する正誤判定問題。問われた事項は、①三池炭鉱の払下げ先、②開拓使官有物払下げ問題、③岩崎弥太郎と三菱、④足尾銅山の経営で、基本的な知識があれば解答可能である。問2から問4にかけての説明文や選択肢は、どれも読み取りがしやすいよう配慮されている。本問はシンプルな出題が多く、「日本史A」の受験者も解答することが考慮されているものと考えられるが、例年お願いしているように、「日本史A」と「日本史B」とでは、科目の目標も性質も大きく異なる。共通問題を出題した結果、「日本史B」の受験者の多くが高得点となる反面、「日本史A」の受験者がなかなか得点できないといった問題はないか、検討をお願いしたい。

第6問は、近現代の公園に関する設問で、「日本史A」との共通問題である。中間Aは公園で開かれた集会和政治・社会との関係、中間Bは新しい文化の紹介と公園との関係、中間Cは国家的行事と公園との関係が題材となっている。中間Bでは、第五回内国勸業博覧会の図版が添付されたが、設問に関係するものではなかった。問1は語句の組合せによる空所補充問題。皇居前広場との関係からメーデー事件と憲法（発布20周年式典）が問われたが、いずれも基本的事項であり、説明文を見れば容易に解答できるものであった。問2は日比谷公園で開催された催事に関する新聞記事・広告の図版を提示し、年代順に配列させる問題。このような形式の問題は2014年度の「日本史A」で出題例がある。史料を読み取って適切に位置づけていく力をみる問題として評価できるが、本問の場合、選択肢に見出しと同じ注記が改めて示されており、図版をほとんど参照しなくても解答できてしまう。また、新聞紙面の画像が粗く、史料の読み取りに難があるので、精細な画像を掲載するよう、配慮をお願いしたい。日比谷公園での出来事として認知度の高い日比谷焼き打ち事件は、今回は扱われなかった。問3は近代の要人暗殺事件に関する正誤組合せ問題。伊藤博文暗殺と血盟団事件が扱われているが、説明文は標準的な水準で作成されており、受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。問4は近代の工業化に関する設問で、説明文と地名の組合せを選ばせるものである。三菱長崎造船所と大冶鉄山がとりあげられている。八幡製鉄所と大冶鉄山との関係は、近年では2011年度「日本史B」第5問の間3に類題がみられる。なお、三菱については、今回の試験では第5問の間4でも見られた。設問数が限られている中で、近接した内容の出題は避けるよう配慮をお願いする。問5は明治期の刊行物に関する正誤判定問題。取り上げられている刊行物は、いずれもなじみ深いものであるが、文化と政治との関わりも意識して学習することが求められる。問6は米の生産に関する統計資料を読み取り、正誤の組合せで解答する問題。Xは表

の数値（田耕地面積や単位面積当たり米生産量）からそれらの増加率を計算し、考察することが求められている。Yでは、1901年以降の米生産量の増加理由に関する正誤判断が求められた。農業の機械化が行われた時期を正しく把握できているかが試される問題であるが、Yの「農業協同組合」は掲載されている教科書が少なく、やや詳しい事項に属する。これを基本的な用語である「農業基本法」に置き換えることも考えられるであろう。問7は「国体」をキーワードとした、昭和戦前・戦中期の政治史に関する正誤判定の問題。問われている事項は、『国体の本義』、治安維持法の制定と改正、ポツダム宣言の内容で、いずれも標準的な内容である。①の『国体の本義』の発行者に関する知識は重要であるが、『国防の本義と其強化の提唱』と混同しやすく、受験者にとって判断がやや難しかったであろう。問8は長州藩出身者が組織した内閣の業績を年代順に配列する問題。取り上げられた事項は軍部大臣現役武官制の導入、大逆事件、米騒動であり、明治後期から大正期の政治の大局的な流れが把握できていれば解答に迷うことはなかったと思われる。ただし、I～Ⅲの各文に内閣名が明記されていることから、歴代内閣の順序を暗記していれば解答可能である。解答形式を正誤判定や正文組合せにすることで、この点は改善できるのではなかろうか。

### 3 ま と め

今年度の「日本史A」は、平均点が37.47点と昨年度から更に大きく下降し、「日本史B」との差は21.82点と依然として看過できない状況である。試験の公平性の観点からも、「日本史B」との差が10点程度におさまるよう、平均点が50点を超えるような問題作成をお願いしたい。また今回も「日本史A」の大問2題が「日本史B」との共通出題であった。学習指導要領では「日本史A」と「日本史B」は設置の趣旨が異なる。共通問題は、「日本史A」の受験者にとっては細かな内容も含まれており、難易度がやや高く、平均点を押し下げる要因となっていると考えられる。「日本史A」の趣旨に配慮の上、独自問題の作成を検討していただきたい。

今年度の「日本史B」では、図版や文字史料の積極的な活用が図られており、資料活用を重視する学習指導要領の趣旨がよく反映されていた。説明文も、歴史に対する新たな視角を受験者に提示しようと工夫された、意欲的なものが作成されており、評価できるが、一方で高等学校での学習内容との乖離が見られ、受験者が難しいと受け止めた部分もあったのではないかと考える。また出題形式はバランスが取れていたが、時代別で見ると、小問36問のうち12題に近世（織豊時代・江戸時代）に関する問題が含まれており偏りが見られた。出題分野別では、一つの小問の中に複数の分野の内容を含めるなどの工夫がなされ、政治分野に重きを置きながらも、各分野から出題するような配慮が見られた。また、統計資料の読み取り問題が復活したことも評価したい。ただ今年度も、近年の出題内容と近似する問題や、近接したテーマを複数の小問で取り上げる事例が見られた。問題作成に当たっては内容等の重複が生じないように、十分な配慮をお願いする。

ところで、今年度の「日本史」問題と他の地歴問題の平均点を比較すると、「日本史B」に対し「世界史B」は6.15点、「地理B」は3.05点、「日本史A」に対し「世界史A」は5.36点、「地理A」は19.61点上回った。特に「世界史」との差が昨年度と比べて大きく開いており（昨年度は「世界史B」は1.7点、「世界史A」は1.26点、「日本史B」「日本史A」に対して平均点が上回っていた）、配慮をお願いしたい。

最後に、こうした提言に真摯に対応していただいていることを踏まえて、更に、様々な意見交換の場が少しでも多く設定されることを期待する。